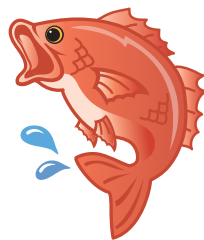


ワークショップフェスティバル・DOORS 9th 「自作ルアーでマダイを釣ろう!!」

2015年8月15日／旭区民センター



真鯛をルアー（疑似餌）で釣る方法を、シマノインストラクターで当協会専務理事の佐々木洋三が、今夏開催のDOORSで伝授した。

DOORSは2007年にはじまり、今年9年目。「文化は人がつくる」をコンセプトに、市民からの公募によるワークショップを毎年開催し、「人や文化との新たな出会いの扉（DOOR）を開こう」と呼びかけている。1講座（90分）1コイン（500円）という手軽さが好評で、他府県からの参加者も多い。今年はアート・クラフトや音楽、演技、ダンス、能楽など、99講座の体験型ワークショップが開講。8月12日から18日まで、7日間で延べ1,511人が参加した。

8月15日に実施された「自作ルアーでマダイを釣ろう!!」には、親子連れなど16人が参加。佐々木講師が案内人を務める「新しいおとなのオフタイム（提供：シマノ・当協会ホームページで動画配信中）」に出演しているレポーターの仲みゆきさんも駆けつけた。

冒頭、佐々木講師は、関西の釣りの歴史や日本近海の魚種について解説。約3800種の魚種のうち、「～ダイ」と呼ばれる魚が300種類以上あることや、「鯛」は魚の名前としては日本でもっとも古いこと、鯛のルアー釣りが生まれた歴史的背景、鯛のおいしい時期など、興味深い話を紹介した。さらに、「新しいおとなのオフタイム（徳島県鳴門市・後編）」のVTRで実際のルアーによる鯛釣りを紹介すると、参加者は身を乗り出してそれを見つめた。

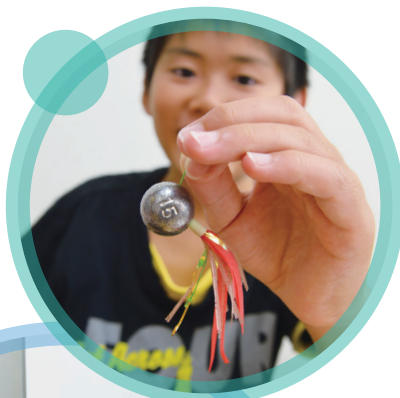
この日作るルアーは「鯛ラバ（ラバジギング）」と呼ばれるもので、元々は佐賀ノ関の漁師が考案した漁具。雑食性の鯛がヒラヒラと動くものに食いついてくる習性を利用した疑似餌で、一見、祭り飾りのようなカラフルな姿をしている。参加者は、佐々木講師が用意した材料を使って、自作の鯛ラバ作りに挑戦した。

まず、針に糸を結ぶ方法を教わった参加者は、鯛をおびき寄せるシリコンラバー製の「ネクタイ」と呼ばれる疑似餌をカッティング。それをオモリや針、ネクタイ周り飾りと組み合わせ、1時間ほどで完成させた。作業の途中、参加者からは、「ネクタイってどんな役割をするの?」「鯛が好む色ってあるの?」などの質問が出された。

小学6年生の子どもと親子で参加した女性（大阪市）は、「いつもは南港でサビキ釣りしているが、一度は鯛を釣ってみたいと参加した。鯛ラバだと餌をつけなくていいから手が汚れなくてうれしい」と話した。男の子は「針に糸を結ぶところがちょっと難しかったけど、上手くできたと思う。早速、鯛釣りに挑戦したい」と目を輝かせた。



佐々木洋三講師



ワークショップフェスティバル・DOORS 9th

IWF実行委員会（関西・大阪21世紀協会、LLPアートサポート [大阪市立芸術創造館 指定管理者]）が主催し、2015年8月12～18日の7日間、メビック扇町、旭区民センター、大阪市立芸術創造館にて開催された。

佐々木洋三（ささきひろみ）

1981年サントリー株式会社入社、マーケティング部門や経営企画部、社長室などを経て、現在、同社秘書室より当協会に外向。「17食博覧会・大阪」総合監修、関西元気文化圏推進協議会幹事、平成OSAKA天の川伝説実行委員会副委員長などの他、株式会社シマノの釣りインストラクターを務め、マダイ・ラバジギング（疑似餌釣法）の第一人者でもある。